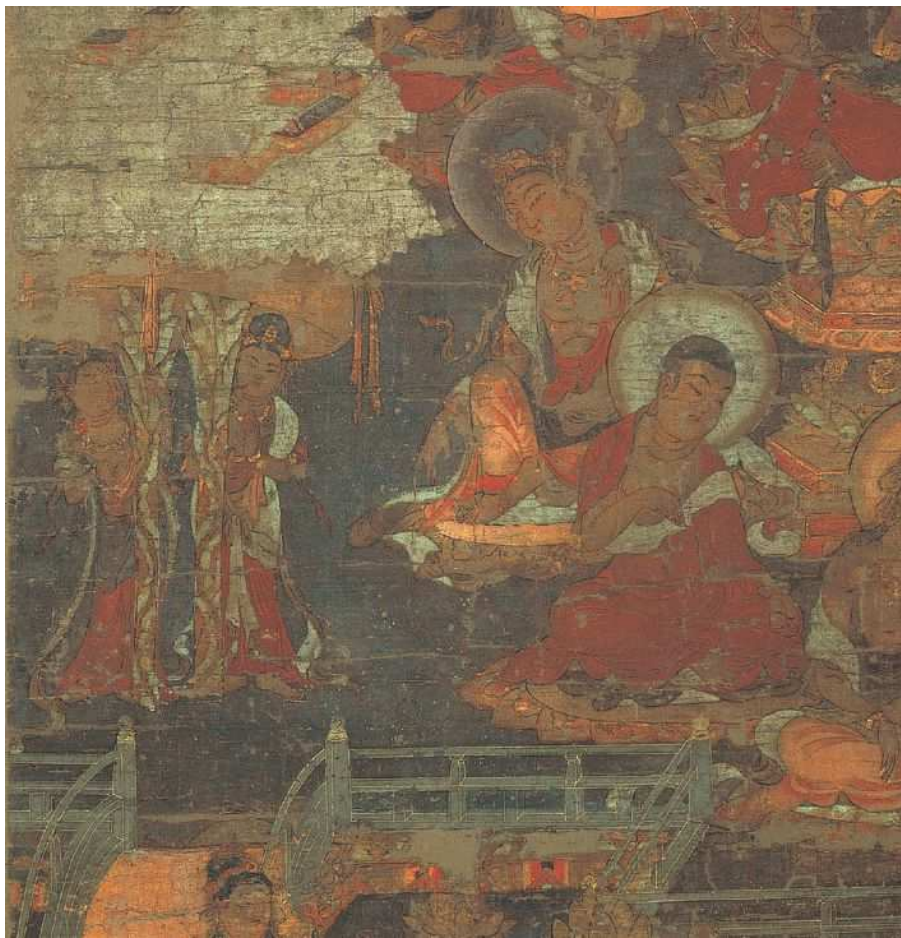


Nara National Museum

奈良国立博物館 だより

第69号

平成21年 4・5・6月



重要文化財 阿弥陀浄土図(部分) 当館 (平常展「仏教美術の名品」より)

特別展

唐招提寺金堂平成大修理記念

国宝 鑑真和上展

4月4日(土)～5月24日(日)

東/西新館

特集展示

とてもよく似た
二つの仏像

—金峯山寺の釈迦如来像と
兵庫県所蔵の天部像—

～5月17日(日)

本館 第1室

平常展

仏教美術の名品

本館 平常開館

西新館 6月9日(火)～7月5日(日)

中国古代青銅器

本館 平常開館

特別展

唐招提寺金堂平成大修理記念

国宝鑑真和上展

4月4日(土)～5月24日(日)
東西新館



●鑑真和上坐像

さて、唐招提寺の中心に建つ金堂には、数多くの仏像が安置されています。また、建物自体も貴重な奈良時代の建築物として、国宝に指定されています。ところが、創建から長い年

奈良西ノ京の唐招提寺は、鑑真和上が創建した寺院です。鑑真和上は、言わずと知れた中国・唐出身の僧侶で、数度にわたる渡航の失敗を乗り越え、天平勝宝五年(七五三)に日本へ渡ってきました。はじめ東大寺の戒壇院を活動の拠点としましたが、後に平城京内に唐招提寺を開き、天平宝字七年(七六三)に遷化するまでここに居を置きました。

和上の遷化前後につくられた鑑真和上坐像は、日本の肖像彫刻の傑作として有名です。結跏趺坐して静かに瞑想するその姿は、幾多の苦難にも屈せず仏教伝道の理想のため邁進した、鑑真和上の強い意志を私たちに感じさせてくれます。本展では、この肖像や、鑑真の出家から来日、遷化までを描いた東征伝絵巻をはじめとする数々の寺宝を展示し、鑑真和上の偉業を讃えます。



●勅額



●東征伝絵巻(第二巻) 二回目の渡航失敗。和上の乗った舟は大破。(展示期間: 4月4日～26日)



●鷗尾(西) 奈良時代



●鷗尾(東) 鎌倉時代



薬師十二神将像



●金亀舎利塔



法華経 巻第八(展示期間: 4月28日～5月24日)



●広目天立像(金堂四天王像のうち)



●梵天立像(金堂安置)

耐え千二百年以上の時を経て伝わったことは、まさに奇跡と言えます。とはいえ、表面の風化は相当に進んでおり、今回の解体修理を機に、屋根から下ろされることになりました。本展では、この奈良時代の鷗尾を、鎌倉時代にそれを模してつくられた東方の鷗尾とともに、寺外で初めて展示いたします。

現在の唐招提寺には、数多くの信仰の所産が伝わっています。鑑真和上が建てた伽藍、そして寺宝を守り伝えたのは各時代の僧侶であり、彼等の心の支えとなつたのが和上の教えでした。本展は信仰に支えられ脈々と受け継がれてきた文化遺産の有り難さ、そしてそれを次代へ伝えていくことの大切さを再認識する絶好の機会になるものと思います。

聖地寧波 日本仏教1300年の源流

「すべてはここからやって来た」

7月18日(土)～8月30日(日)
東西新館

当館ではこの夏、中国浙江省の寧波(ニンポー)という町をテーマに、「ここを拠点として発展した日本と中国の仏教美術の交流を紹介する展覧会を開催します。ここではその見所を簡単に紹介しましょう。

四方を海に囲まれた日本は、古来、海を越えて渡ってくる大陸の文化から多大な影響を受け、それを発展させながら独自の文化を築き上げてきました。特に遣隋使や遣唐使、あるいは宋の商船などによってもたらされた中国の品々は、つねに時代の最新モードとして日本人の憧れの対象であり続けました。

こうした日本と中国の海を通じた交流において、中国側の最大の窓口とされた港町が、本展覧会で取り上げる寧波です。寧波はかつて明州とも呼ばれ、浙江省の省都・杭州を間近にひかえる中国有数の港として発展してきましたが、それにも増して寧波が日本人を魅了し続けたのは、この町を中心に栄えた最新の仏教文化に他なりません。



図1 中国国家一級文物
釈迦如来坐像(杭州靈峰塔地宮出土遺物) 浙江省博物館

今から一三〇〇年以上前に生まれた鑑真和尚は、本格的な戒律を伝えるため、日本を目指しました。鑑真は五度にわたって渡航に失敗したのですが、その第二回日の日本渡航計画の折りに、鑑真はしばらく阿育王寺という寧波の寺院に滞在しています。この鑑真



図2 ●釈迦如来立像 清涼寺
(展示：7月18日～30日)

きました。本展では、中国浙江省各地の北宋時代の仏舎利塔から

出土した、阿育王寺の仏舎利信仰を濃厚に反映する遺宝の数々(図1)を紹介するとともに、これらと同じ時期に同じ浙江地方で造立されたことが判明する清涼寺の本尊・釈迦如来立像(図2)を、出陳します。

さて、海上交通の要所である寧波にとって、寧波の沖に浮かぶ普陀山は、航路の安全を祈願する信仰の島としてひととき重要な存在です。ここは観音信仰の聖地として中国四大名山の一つにも数えられており、現在も東アジア各地から多くの人々が巡礼に訪れています。普陀山の観音信仰は、もともと日本僧・慧萼が観音像を祀ったことが起源となっており、鎌倉時代にはこの住職だった一山一

寧が来日して最新の禅宗文化を伝えるなど、日本ととりわけゆかりの深い聖地といえるでしょう。楊貴妃観音の名で親しまれている泉涌寺の観音菩薩坐像(図3)は、同寺を開いた俊僊の弟子・湛海が中国から伝えたもので、普陀山に祀られていた観音像の姿を忠実に写したと考えられる南宋彫刻の傑作です。

ところで寧波の仏教寺院は、中国仏教の一大中心地だった天台山を間近にひかえることもあり、天台仏教の影響を大きく受けていました。こうした寧波の仏教の姿を具体的に知る上で、大徳寺に



図3 ●観音菩薩坐像〈楊貴妃観音〉
泉涌寺 (展示 7月18日～8月2日)



図5 ●慧可断臂図〈雪舟筆〉 齊年寺
(展示：8月11日～30日)

名品の数々を一堂に会して、日本人が憧れ続けた寧波の仏教文化の魅力を広く紹介します。

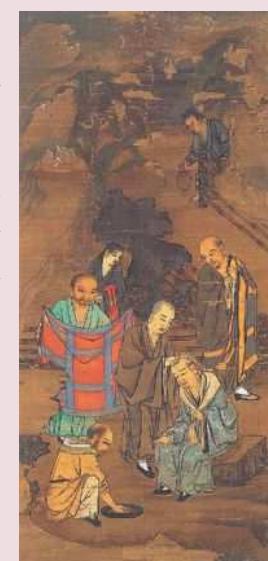


図4 ●五百羅漢圖 大徳寺
(展示替あり)

所蔵される五百羅漢図(図4)の存在は極めて重要です。もともと百幅からなっていたこの羅漢図のセットは、寧波郊外の東銭湖畔にかつてあった惠安院という寺院に伝わったものでした。百幅の中には法会や剃髪・食事・入浴など、寺院での僧侶の生活を羅漢が生き生きと演じている場面が数多く含まれており、ここから寧波仏教の姿を具体的に知ることができます。本展では大徳寺本八十二幅を初めて全点公開するとともに、明治初期に米国に流出したボストン美術館本十面のうち二面を里帰りさせる予定です。

また、寧波に数ある禅宗寺院の中でも、中国禅宗五山に数えられる天童寺は、日本禅宗の草創期に活躍した栄西や道元などが禅を学ぶなど、日中禅林交渉史上に格別な存在です。水墨画の大家として有名な雪舟は、晩年の代表作である慧可断臂図(図5)に「四明天童第一座雪舟」と落款を入れており、四明(寧波)の天童寺で第一座の称号を得たことが、禅僧としていかに誇らしいことだったかがうかがわれるのです。

以上のように本展では、寧波という町がもつ「仏教の聖地」としての側面に光をあて、かの地からわが国にもたらされた仏教美術の

重源と四天王像

清水 健 (学芸部研究員)



図1
時に遡ると考え

三角五輪塔は、鎌倉時代に東大寺を復興したことで知られる重源上人(一一二一―一二〇六)周辺に多くの遺例がみられることは夙に知られている。かつては重源が三角五輪塔を創案したとの説も有力であったが、近年醍醐寺義範流の舍利信仰の中で生み出されたとする見解が示され、この説は再考を迫られている。それはそれとして、醍醐寺流の密教を継承したという重源周辺に三角五輪塔が顕著に多いのは事実であり、またその後この形式がほぼ途絶えてしまっていることもまた事実である。重源ゆかりの「もの」は、平成十八年に当館で開催した「大勧進 重源——東大寺の鎌倉復興と新たな美の創出——」展にて展示された品々をはじめ現存するものが多いが、重源自身の事蹟を伝えるもの(『南無阿弥陀仏作善集』東京大学史料編纂所蔵)はあつても、重源自身の思想やことばを伝える文献は伝わっておらず、その信仰世界は今なお謎に満ちているといつてよい。

さて、三角五輪塔形舍利容器のうち金銅製のものが、滋賀・胡宮神社(敏満寺伝来、建久九年(一一九八)、兵庫・浄土寺(建久五年(一一九四頃か)、奈良・東大寺(天正十四年(一五六六)に都合三例伝わっている。このうち東大寺蔵品(図1)は永禄十年(一五六七)の

兵火で罹災した東大寺浄土堂安置の「金銅五輪塔」を再興したものと考えられ、原品は重源在世時に遡ると考え



図5



図4



図3



図2



図7



図6

持して邪鬼の上に立つている(図5)。以上はいわゆる大仏殿様四天王像の図像と一致する。大仏殿様とは、鎌倉時代に復興された東大寺大仏殿に安置された四天王像(建久七年(一一九六)を規範として作られたと考えられる四天王像のことで、「東大寺大仏殿図」(京都・醍醐寺蔵)の記述が一つの典拠となっている。重源が大仏殿の再興に際して、尊像の図像の選択にどのような関与したかは詳らかでないが、近年大仏殿様四天王像が重源の創案ではなく、奈良時代造立の当初像を踏襲している可能性が提示されており、大仏の両脇侍像を含めて先例を踏襲した可能性がある。そうであれば重源は、東大寺蔵三角五輪塔(当初品)の造立に際し、その図像を引用したと考えられよう。

ところで他の二品に目を向けるとまた興味深い事実が指摘できる。いずれも外形は東大寺蔵品と大きく異なることからそのまま大仏殿様の四天王像が表されているようなものであるが、まず双方とも邪鬼が表されず、岩座に四天王が立つたこととなつている。また仮に邪鬼は小品であるが故に省略されたとしても、胡宮神社蔵品では持国天が右手を腰に当て、左手は地についた剣の柄に添えている点(図6)や多聞天の持物が左右逆になつている点が大仏殿様とは異なっている。ちなみに、この持国天の図像は中国・江蘇省蘇州市瑞光寺塔から発見された四天王木函彩画(北宋・一〇一三年)に表された持国天像と一致しており、重源の入宋体験を踏まえると一層興味深い。一方、浄土寺蔵品では胡宮神社蔵品の持国天がそのまま増長天になつている点や多聞天の持物がやはり逆で、右手が戟から宝棒に替わっている点(図7)が異なる(図7)。

重源が深く関わったと考えられる三角五輪塔で、四天王像の図像に混乱がみられるのは、いかなる理由によるものか俄に決しがたい。重源の信仰世界をめぐる謎は深まるばかりであるが、結論は後考を俟つとして、ここでは従来あまり論じられることのなかった問題を提起するに留めたい。

平常展

仏教美術の名品

本館 第1～13室
4月～6月

彫刻

第1室

【大和の仏たち】●木造薬師如来立像（元興寺）、●木造薬師如来立像（称名寺）、●木造伝明星菩薩立像（弘仁寺）、●木造虚空蔵菩薩半跏像（北僧房）、●脱活乾漆木造梵天立像●脱活乾漆・木造伝釈脱菩薩立像（以上、秋篠寺）、●木造持国天立像、●木造多聞天立像、●木造西大門勒額（以上、東大寺）、●木造法相六相像（伝行賀・伝神寂）（興福寺）、●木心乾漆伝義淵僧正坐像（岡寺）、●木心乾漆阿閼如来坐像（西大寺）、●木造十一面観音立像（勝林寺）、●木造十一面観音立像（地福寺）、●木造菩薩立像（金竜寺）、●銅造誕生釈迦仏立像及灌仏盤（東大寺）、●木造大黒天立像（興福寺）

「5月17日」、●木造大黒天立像（西大寺）
「5月17日」、●木造十一面観音立像（薬師寺）
「5月19日」、●銅板法華説相図（長谷寺）
「5月19日」、●銅造薬師如来坐像（当館）
「5月19日」

【特集展示】とてもよく似た二つの仏像
「5月17日」木造釈迦如来坐像（金峯山寺）、
木造天部立像（兵庫県）

第2室

【興福寺伝来の四天王像】
●木造増長天立像、●木造多聞天立像（以上、当館）、●木造広目天立像（興福寺）

【観音菩薩】

●木造観音菩薩立像（観心寺）、●木造観音菩薩立像（セゾン現代美術館）、●木造千手観音立像（妙法院）、●木造十一面観音立像（元興寺）、●木造馬頭観音立像（浄瑠璃寺）
「5月17日」

【迎請の阿弥陀仏】

●木造阿弥陀如来立像（裸形像）（浄土寺）

【注目の逸品】「5月19日」

●木造獅子・象

個人蔵
木造・彩色・玉眼 鎌倉時代（13世紀）



第3室

【光背の美】●木心乾漆光背（聖林寺）、●木造光背（當麻寺）
【薬師如来と十二神将】●木造薬師如来坐像（当館）、●木造十一神将立像（東大寺）

第4室

【ガダラの彫刻】石造菩薩立像、石造仏伝図浮彫（以上、当館）
【中国石窟寺院の仏像】石造如来頭部（雲岡）、石造菩薩頭部（鞏県）、石造菩薩頭部（響堂山）、石造螺髻像頭部（響堂山）（以上、個人）

【中国・朝鮮半島の金銅仏】銅造誕生釈迦仏立像、銅造押出五尊仏、銅造供養者坐像、銅造菩薩坐像、銅造力士立像、銅造力士立像、銅造力士立像（以上、個人）、銅造一仏並坐像（当館）
銅造如来立像（光明寺）、銅造如来立像（当館）
「4月7日」、銅造菩薩立像（個人）
「4月7日」

第5・6室

【中国の仏像】木造菩薩坐像、石造如来坐像（以上、個人）、●木造諸尊仏龕（個人）、●石

造十二面観音立像、●石造三尊仏龕（以上、当館）、●石造三尊仏龕、石造仏五尊碑像、石造仏立像、石造浄土碑像（以上、個人）

第7室

【檀像】●木造十一面観音立像（海住山寺）、●木造弥勒仏坐像（東大寺）、●木造観音菩薩立像（本山寺）、●木造十一面観音立像（当館）

第8室

【金銅仏】●銅造誕生釈迦仏立像（正眼寺）、銅造観音菩薩立像、銅造観音菩薩立像（以上、当館）、●銅造菩薩立像（法起寺）、銅造菩薩立像（興福院）、●銅造観音菩薩立像（観心寺）、●銅造菩薩半跏像（神野寺）、●銅造菩薩半跏像（東大寺）、●銅造観音菩薩立像（金剛寺）、銅造観音菩薩立像（個人）

【塑像と埴土】●塑像断片（奈良県薬師寺西塔出土）、●塑像人物頭部（奈良県薬師寺出土）（以上、薬師寺）、●侍者像（法隆寺塔本塑像）、●塑像菩薩頭部（奈良県定林寺出土）（以上、当館）、●塑像断片・方形三尊埴土（奈良県原寺裏山出土）（明日香村）、●塑像断片（滋賀県雪野寺出土）（個人）、●塑像断片（鳥取県青尾寺出土）、●火頭形三尊埴土（伝奈良県橘寺出土）、●六角形埴土（三重県天華寺跡出土）（以上、当館）、●多宝塔埴土（中国）（個人）

第9室

【釈迦如来】木造釈迦如来坐像（法隆寺）、●木造釈迦如来坐像（東大寺）、木造山釈迦立像、●木造釈迦如来立像（清凉寺式）（以上、当館）、●銅造誕生釈迦仏立像（悟真寺）、銅造誕生釈迦仏立像、銅造誕生釈迦仏立像（以上、当館）

【阿弥陀如来】木造阿弥陀如来坐像（当館）、木造阿弥陀三尊像（峰定寺）、木造阿弥陀如来立像（個人）、木造阿弥陀如来坐像（西大寺）、木造阿弥陀如来坐像（宝冠阿弥陀）（安楽寿院）

第10室

【地藏菩薩】木造地藏菩薩立像（十市町自治会）、●木造地藏菩薩立像（東大寺）、木造地藏菩薩立像（新薬師寺）、●木造地藏菩薩立像（長命寺）

第11室

【大日如来】木造大日如来坐像（元興寺町）、木造大日如来坐像（西城戸町）

【聖徳太子像】●木造聖徳太子立像（成福寺）、木造南無仏太子像（法起寺）、木造南無仏太子像（当館）、木造南無仏太子像（西大寺）

【大將軍神像】●木造大將軍神坐像（大將軍八神社）、木造大將軍神坐像（当館）

第12室

【動物彫刻】●木造狛犬、木造牛頭、木造獅子（以上、当館）、●木造狛犬（手向山八幡宮）

第13室

【明王像】木造五大明王坐像、銅造不動明王立像（以上、当館）、木造不動明王立像（個人）、銅造大威徳明王騎牛像、●木造愛染明王坐像（以上、当館）

【天部像】●木造四天王立像（現光寺）、●木造十二神将立像（辰・未）（室生寺）、●木造増長天立像（法明寺）

平常展

中国古代青銅器 坂本コレクション
本館 第14・15室

中国古代の商・殷から漢時代に製作された青銅器の逸品を展示しています。

爵、觚、觶、長頸尊、觚形尊、罍、方彝、卣、鬲、鼎、鬲、鬲、罍、豆、盤、匜、盥、壺、鐘、鈎、扁壺、蒜頭壺、甗、鏡、博山炉、鎮子、錢、鏐子など（当館）



●鳳凰文罽(南法華寺)



●蓮唐草罽絵経箱(当館)



●透彫華罽(金色院)



慈信金岡東庄寄進状(額安寺文書)(当館)



●吉野曼荼羅(西大寺)

平常展

仏教美術の名品

〔絵画・書跡・考古・工芸〕

6月9日(火)～7月5日(日)

西新館

注目の逸品

〔6月9日～7月5日〕

〔絵画〕道慈律師像、聖徳太子像(以上、当館)

〔書跡〕●愚昧記(東京大学史料編纂所)

〔考古〕●鳳凰文罽(南法華寺)

〔工芸〕組法具(真光寺)



道慈律師像(当館)

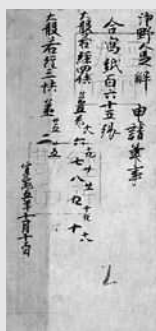
絵画

藤原鎌足像(当館)、藤原武智麻呂像(栄山寺)、○二字金輪曼荼羅、○虚空蔵菩薩像(以上、当館)、千手観音二十八部衆像(千光寺)、●地天像(十二天像のうち)(西大寺)、●高雄曼荼羅図像(長谷寺)、○不動儀軌、○阿弥陀浄土図、当麻曼荼羅(以上、当館)、清海曼荼羅(聖光寺)、○阿弥陀四十九化仏来迎図(光明寺)、○地藏菩薩像(知恩院)、○矢田地蔵縁起(金剛山寺)、○当麻寺縁起(當麻寺)、熊野曼荼羅(文化庁)、○吉野曼荼羅(西大寺)、役行者像(上人田区)

書跡

写経手鑑(紫の水)(当館)、大悲経卷第二(五十一日経)(正暦寺)、増・阿含経卷第三十九(善光寺)、○華嚴経卷第五十、不空罽索毘盧遮那大灌頂光明真言(中尊寺経)、慈信金岡東庄寄進状(額安寺文書)(以上、当館)、吉水院坊領証文紛失状(吉水神社)、大般若経(長弓寺)

写経手鑑「紫の水」 当館蔵



筆跡の正本とするために、和歌集などの典籍、古文書、写経などの断簡を台紙に貼り込んだものを手鑑という。「紫の水」は、奈良時代から鎌倉時代までの古写経の断簡ばかりを集めた手鑑で、折帖の表裏に全部で三十八枚が貼り込まれている。

「大聖武」(図1)は奈良時代を代表する写経の名品で文字が通常の写経よりも一回り大きく、一般的な写経が1行に17字を収めるのに対し「大聖武」は1行12字となっている。その太く力強い筆跡は、古くより愛好家たちを魅了してきた。

ところで、この手鑑のうちには一枚だけ写経ではないものが含まれている。それが図2に示した古文書で、宝龜五年(七四四)に写経所の浄野人足が写経に必要な筆の支給を求めたものである。

考古

土偶(山形・杉沢遺跡出土)、土偶(小野コレクショ)、銅鐸(長崎・黒島出土)(以上、当館)、銅鐸(妙国寺)、銅鐸(静岡・釣荒神山出土)、○奈良・天神山古墳出土品、軒丸瓦(伝奈良・横井廃寺出土)、軒丸瓦・軒平瓦(伝

奈良・山村廃寺出土)、軒丸瓦(伝奈良・山田寺出土)、軒丸瓦(伝奈良・東大寺出土)(以上、当館)、鬼身文瓦(奈良・薬師寺出土)(京都国立博物館)、鬼面文瓦(奈良・中山瓦窯出土)(当館)、鬼面文瓦(奈良・秋篠寺出土)(個人)、●栗原寺伏鉢(談山神社)、○佐井寺僧道業墓出土品、○山代忌寸真作墓誌、○出雲荻野古墓出土品(以上、当館)、○青磁鉢(奈良・正暦寺出土)(正暦寺)、陶製経筒(愛媛・北条市出土)、○経塚出土品(永久四年銘、伝福岡県出土)、粉河経塚出土品(以上、当館)、○銅板経(大分・長安寺経塚出土)、(長安寺)、瓦経(福岡・飯盛山経塚出土)、青石経(愛媛・大日堂経塚出土)、泥塔経(鳥取・智積寺経塚出土)(以上、当館)

工芸

刺繍釈迦阿弥陀三尊図(当館)、刺繍釈迦三尊図(真正極楽寺)、刺繍阿弥陀三尊来迎図(中宮寺)、刺繍阿弥陀三尊来迎図(個人)、刺繍六字名号(宝鏡寺)、○刺繍両界曼荼羅図(太山寺)、●牛皮華鬘(呂・登・知・留号)(当館)、●透彫華鬘(金色院)、尾長鳥文華鬘(当館)、●蓮唐草罽絵経箱(当館)、彩絵厨子(長福寺)、彩絵厨子(個人)、愛染明王彩絵舍利厨子(個人)、宝篋印塔嵌装舍利厨子(福田寺)、密観宝珠嵌装舍利厨子、笈(以上、当館)、笈(個人)、○鏡(円福寺)、○三昧耶文五鈴鈴(金峯山寺)、独鈴鈴、三鈴鈴、宝珠鈴(以上、当館)、○金剛盤(巴陵院)、独鈴鈴、三鈴鈴、五鈴鈴、宝珠鈴、羯磨、輪宝、金鐺、五鈴鈴、五鈴鈴、五鈴鈴、五鈴鈴、五鈴鈴、五鈴鈴(以上、当館)、五鈴鈴(高山寺)、五鈴鈴(松尾寺)、五鈴鈴(薬師寺)、五鈴鈴(個人)

●国宝 ●重要文化財
すべての展示において、出陳作品を一部変更する場合があります。

【表紙写真解説】

●阿弥陀浄土図

当館
絹本着色
縦一六・二cm、横一三四・〇cm
平安時代(12世紀)



平安時代に描かれた阿弥陀浄土図。左右対称性をもった幾何学的構図は中国の唐時代には出来上がっており、中国・敦煌の壁画などに類似する構図がある。本図は日本にもたらされた中国の図様をもとに製作された作品である。

平安時代に貴顕の間で広く読まれた患心僧都源信(九四二―一〇一七)の『往生要集』をひもとくと、阿弥陀如来の極楽浄土について、仏法が満ちるとともに、寒暖なく常に快適で、食料は望むままに得られ、なおかつ美味。そして、草花は香しく柔軟で触れる者を幸せにすると同いう。地面は瑠璃砂は金や銀などの宝石で構成され、常に光を放つてきらめく。仏のもとで、苦がなく、美しい、夢のような世界である。

文献史料をたどると、阿弥陀浄土図は死者の追善供養に用いられた例が多い。人々は、死者が無事に極楽浄土へ到達することを願いながら、阿弥陀如来のもとで楽しげに過す菩薩衆を目にし、極楽浄土への憧れの思いを届強くしたのかも知れない。

6月9日～7月5日、
平常展(西新館)に展示

展示の現場から

雛人形

吉澤 悟
(教育室長)

この春、奈良国立博物館では「小さなギャラリー 雛人形」を開催しました。僅か60平方メートルの小さな展示室に、江戸時代中期から大正時代までの雛人形や御所人形などを14件、ごく小さな芥子人形まで数えると合計63体を展示しました。

見所は高さが40センチメートルを超える享保雛(18世紀 図1)。まだ段飾りが定着しなかった頃の大柄なお雛様で、袖をピンと張った男雛の束帯姿や女雛のふくらとした袴が特徴的です。ひき目、鍵鼻にちよと開いたお口にも時代が感じられます。また、これに続く有職雛(江戸時代後期 図2)は、お公家さんの元に出入りする人形師が有職故実にならって正しく衣装をしつらえた見事なお雛様です。この他にも、衣装を紙で作った古式の立雛や、奈良の伝統工芸として知られる「刀彫のお雛様、あるいは関西の旧家では雛段に並べ置かれることの多かった御所



図2 有職雛

人形など、様々な人形が赤い毛氈の上に並びました。艶やかであどけなく、また可愛らしい人形たちがケース越しにこちらを見つめている様子は、錚々たる国宝・重文が並ぶ展示室の狭間

にあつて、静かに春を呼び込むような和やさがありました。

奈良国立博物館の百有余年の歴史において、雛人形の展示はおそらく初めてのこととなります。奈良の地に人形文化がなかったわけではありませんが、絢爛たる寺社の宝物の前には影が薄く、モードの中心地たる京都の株に並ぶべくもないと思われがちでした。また、雛人形をはじめ人形そのものが文化財としてよりも、玩具や民芸品的な認識に留まっていたことも事実です。現存する人形のほとんどが江戸時代以降のものであり、仏像などに比べてまだ「若い」上、逸品というには作例が多いこともあって、未だに国宝や国指定の重要な文化財に登録されたものではありません。反面、お顔の胡粉は素手で触つてはいけませんし、温度や湿度のちよとした変化でヒビを生じることもあります。千年前の工芸品のように適度な「枯れ」方をしていないため、私たちにとっては逆に気を遣う展示品でもあるのです。

こうした課題や反省を背景にもちながらも、季節に花を添え、お子さんからご年配の方まで皆さんが喜んで下さる企画を本位に、この「雛人形」展の開催にふみきました。所蔵者のご指導とお人形さんの笑顔に励まされ、私たちが初節句を迎えることになりました。



図1 享保雛

●公開講座●

特別展「国宝 鑑真和上展」関連

- 4月11日(土)「共結来縁」
松浦俊海 (律宗総本山唐招提寺長老)
- 4月18日(土)「鑑真和上と日本文化」
東野治之 (奈良大学教授)
- 4月25日(土)「鑑真和上の教え」
西山明彦 (律宗総本山唐招提寺執事)
- 5月9日(土)「唐招提寺金堂の当初復原案—解体調査より判明したこと—」
田中 泉 (奈良県文化財保存事務所主査)
- 5月23日(土)「鑑真和上像と唐招提寺の仏像」
稲本泰生 (当館学芸部企画室長)

※各回とも、午後1時30分～3時、当館講堂にて、**先着200名**(午後1時より講堂入口で入場券を配布し、開場します)。聴講無料。

●サンデー・トーク●

特別展「国宝 鑑真和上展」関連

- 4月19日(日)「唐招提寺2010プロジェクト その10年の道のり」
松田幸雄 (TBSテレビ事業局担当局長)
- 5月17日(日)「唐招提寺の古文書について」
野尻 忠 (当館学芸部研究員)
- 6月21日(日)「唐招提寺の鴟尾を展示し終えて」
岩戸晶子 (当館学芸部研究員)

※各回とも、午後2時～3時30分、当館講堂にて、**先着200名**(午後1時30分より開場)。聴講無料。

◆奈良国立博物館賛助会

2009年4月1日現在、一般会員(個人)25名、一般会員(団体)17団体、特別会員2団体、特別支援会員5団体のご入会をいただいております。

◆キャンパスメンバーズ

当館は、大学等と連携を図り、博物館が所蔵する文化財を核として文化や歴史を共に学ぶ場を提供する「キャンパスメンバーズ」の制度を設けております。

会員大学等の学生および引率教職員は平常展については無料、特別展については400円(共催展の場合は別途定めるものとします)で観覧できます。(学生証および引率教職員は身分証明書の提示をお願いいたします。

【会員大学等(2009年4月1日現在)】

大阪成蹊大学芸術学部、大阪大学、畿央大学、京都教育大学、京都工芸繊維大学、京都嵯峨芸術大学・京都嵯峨芸術大学短期大学部、京都精華大学、京都大学、京都橘大学、京都伝統工芸大学校、近畿大学文芸学部、実践女子大学文学部、就実大学人文学部、種智院大学、帝塚山大学・帝塚山高校、天理大学、同志社大学、奈良教育大学、奈良県立大学、奈良佐保短期大学、奈良産業大学・奈良文化高等学校・奈良学園高等学校・奈良文化女子短期大学、奈良女子大学、奈良先端科学技術大学院大学、奈良大学、佛教大学、龍谷大学(五十音順)

ぞういち あ ごんきょう
増一阿含經 卷第三十九
 ぜんこうしゅいんきょう
(善光朱印經)

1巻
 縦27.7cm 長725.5cm
 奈良時代(8世紀)
 当館

この写経は、巻末の尾題下方にある「善光」の朱印から善光朱印經と呼ばれ、同印の捺されたものは全国で30例あまり知られている。善光は、奈良時代の史料に法華寺尼として名のみえる人物と思われ、善光朱印經は彼女が発願した一切經の遺巻ではないかと推定されている。

善光朱印經は、朱印のほかに詳細な奥書があるのも特徴である。本巻は、まず天平宝字2年(758)4月に僧善平が、この写経のお手本となった本經の内容をチェックし、それに基づいて天平宝字3年12月に中臣村屋連鷹取が筆を執って書写し、3度にわたる校正を経て、表紙や軸をつける装丁を施して完成した。用いられた紙は19枚であったという。写経の奥書に、書写年月日や発願者名を記すことはあっても、手本の準備から3度の校正の担当者名や用紙の数まで記すものは珍しく、1巻の写経がどのような過程を経て作られていったかを詳細に知ることができ、大変興味深い。

かつては「善光」印の朱色も今よりは濃く、奈良時代後期写経の特徴であるたつぷりと墨の付いた太めの筆跡とともに、黄褐色の紙の上で輝きを放っていたであろう。その往時の姿を想像し、尼善光がこの写経に込めた熱意に、思いを馳せてみたい。

野尻 忠(学芸部研究員)

6月9日～7月5日
 平常展(西新館)に展示

平常展の
 みどころ

新発見の密教法具
 くみほうぐ
組法具

1具
 銅鑄製・鍍金
 五鈷鈴 高20.8cm、五鈷杵 長19.0cm
 鎌倉時代(13～14世紀)
 愛媛・真光寺



こんごうばん
 金剛盤と呼ばれる葉をかたどったような形の台に、五鈷鈴を中心に独鈷杵、三鈷杵、五鈷杵を時計回りに配置している。密教の法要が行われる大壇には、これ以外にも様々な種類の法具が置かれるが、このセットは阿闍梨が法要中に手にとって用いる最も重要な品々である。

今日、五鈷鈴や金剛杵は数多く残されているが、当初からのセットが伝わっている例は少なく、本品は鎌倉時代にさかのぼる組法具としてきわめて貴重である。

独鈷杵、三鈷杵、五鈷杵とも把(手に持つ部分)に鬼面を飾っているが、五鈷杵では鬼面を二段に表す点がきわめて珍しい。しかも、鬼面の表情は他に例を見ない独特なもので、本品がどのような法具を写して作られたか興味を持たれるところである。また、五鈷鈴は鈴身に胎藏界四仏の種子を表しているが、種子は別の金属を象嵌して表現されている。胎藏界四仏の種子鈴は鎌倉時代以降しばしば作例が見られるが、種子を象嵌で表した例は知られておらず、また本品のように鈴身に文様を表さない簡素な例は数少ない。

この組法具は三年ほど前に、帝塚山大学の関根俊一教授によって発表され注目を集めたが、その後公開の機会がなく、今回が寺外での初公開となる。

内藤 栄(学芸部長補佐)

6月9日～7月5日 平常展(西新館)「注目の逸品」に展示

開館予定(4月～6月)

■開館時間

午前9時30分～午後5時
 ※4月24日(金)以降の毎金曜日は、午後7時まで
 ※入館は、閉館の30分前まで

■休館日

月曜日
 ※5月4日は、月曜日ですが開館します。

平成21年4月より、高校生および18歳未満の方も、平常展を無料で観覧できるようになりました。
 (東京・京都・九州の各国立博物館、飛鳥資料館も同様です。)

観覧料金

□特別展「国宝 鑑真和上展」

	一般	高校・大学生	小・中学生
個人	1,200円	800円	500円
団体・前売	1,000円	600円	300円

*この料金で、平常展(本館)もご覧になれます。
 *4月22日(水)・5月22日(金)にご夫婦で観覧される方は、一般料金の半額になります。(毎月22日を「夫婦の日」としています。)

□平常展

	一般	大学生
個人	500円	250円
団体	400円	200円

*高校生以下および18歳未満、70歳以上の方は無料です。

*団体は責任者が引率する20名以上です。
 *障害者手帳をお持ちの方(介護者1名を含む)は無料です。



〔交通案内〕近鉄奈良駅下車徒歩15分、またはJR奈良駅・近鉄奈良駅から奈良交通「市内循環」バス「氷室神社・国立博物館」下車

*当館には駐車スペースがございませんので、最寄りの県営駐車場等(有料)をご利用ください。